

ハワイ日本語学校教科書集成  
全10巻

ハワイへの日本人移民は、一八八五年より本格化し、定住化の過程で、第二世代の教育問題が移民社会の懸案となる。アメリカの同化政策、外国語学校取締法、これに対する違憲裁判と勝訴という苦闘のなかで、多いときは日系二世の九割が日本語学校で学んだ。本集成は、一九一八年から四一年までに布哇教育会、布哇中央学院、本派本願寺学務部、ホノルル教育会が子弟教育のために独自に編纂出版した日本語読本と修身教科書を収集。教育史のみならず移民・民族史の貴重な史料である。

- 解説(高木(北山)真理子)付き
- A4判・上製・総約3,300頁
- 本体揃価格280,000円+税
- 11年11月〜12年11月配本完結予定(編集復刻版)
- 推薦Ⅱ沖田行司・白水繁彦・バゼル山本登紀子・吉田亮

吉田亮 編著

アメリカ日系二世と越境教育

―一九三〇年代を主にして―

在米日系二世の日本留学・就学という越境教育現象が、在米日本人移民社会および日米両国家・社会にもたらした影響や意味を、「地域」と「宗教」をキーワードに検証し、日本人移民越境史の一断面を分析する。

- A5判・上製・256頁
- 本体価格3,800円+税
- 12年2月刊

マイグレーション研究会 編

# 来日留学生の体験

北米・アジア出身者の1930年代



A5判・並製・212頁  
定価 本体3,000円+税  
2012年6月刊行  
ISBN978-4-8350-7086-5

公益財団法人渋沢栄一記念財団研究部 編  
実業家とブラジル移住

本書は、これまであまり焦点が当てられなかった、ブラジル移民の生活を支える移住事業を企画経営した実業家に注目した。具体的には、岩崎久彌、渋沢栄一、武藤山治、平生飢三郎という四人の有力な実業家を取り上げ、彼らがブラジル移住事業に対してどのような構想を抱き、それを企業活動としてどう具体化し、実現させたのかを明らかにする。またこれらの四事例をはじめとするブラジル移住事業を支えた金融、海運、国際関係についても分析する。

- A5判・上製・270頁
- 本体価格3,800円+税
- 12年7月刊

李洙任 編著

在日コリアンの経済活動

―移住労働者、起業家の過去・現在・未来―

等質性の維持に力が注がれる日本社会において、外国籍住民を含むマイノリティによる経済活動の研究は立ち遅れていた。本書はとりわけ在日コリアン(日本在住の韓国・朝鮮人を総称)の戦前期からの経済活動に目を向け、その特性を明らかにする。経済のグローバル化を経てマイノリティ・ビジネスの急増した日本社会のあるべき姿をも投げかける意欲作である。

- 執筆Ⅱ河明生・木村健二・田中宏・中村尚司・朴一
- A5判・上製・274頁
- 本体価格3,800円+税
- 12年3月刊

日本力行会(島貫兵太夫初代会長) 発行  
救世 全2巻・別冊1

「救世」は日本力行会を設立した島貫兵太夫が一八九五年に創刊した。明治期キリスト教史、教育史、移民史を補完する重要資料として復刻する。

- 別冊Ⅱ解説(和田教彦・総目次・索引)
- A5判・B4判・上製・総762頁
- 本体揃価格48,000円+税
- 12年7月刊(復刻版)
- 推薦Ⅱ坂口満宏・竹内洋・出村彰

兒玉正昭 著

日本人移民ハワイ上陸拒絶事件

―領事報告を中心に―

一八九七年の事件当時、ハワイ駐在日米総領事が書き残した記録、及び諸文献の豊富なデータをもとに事件の全容を考察し、移民の視点で事件の要因を裏証した重要な研究である。

- A5判・上製・192頁
- 本体価格2,500円+税
- 11年6月刊

木下昭 著

エスニック学生組織に見る「祖国」

―フィリピン系アメリカ人のナショナルリズムと文化―

フィリピン系アメリカ人のアイデンティティを、主にエスニック学生組織を対象として考察。エスニシティとナショナルリズムの交錯、遠隔地ナショナルリズムの形成を丹念に描く。

- A5判・上製・340頁
- 本体価格5,800円+税
- 09年5月刊

● 表示価格はすべて税別

不二出版

〒113-0023  
東京都文京区向丘1-2-12  
電話03-3812-4433  
ファクシミリ03-3812-4464  
振替00160-294084



# 「幻想」にとらわれず、 多様な来日留学生の体験をとらえなおす試み

坂口満宏 (京都女子大学文学部教授)

ここ数年、日系アメリカ人の日本での学習体験をとらえて、しばしば「越境」教育なる術語が用いられている。しかし、これにはいささか違和感を覚えざるをえない。確かに、アメリカから日本にやってきた日系人たちは、制度的な国境を越えてきたのだから「越境」してきた人たちといえなくはない。だが必ずしも何らかの大きな文化的な壁や障害を乗り越えてきたわけではなく、多様な地縁的・血縁的關係や宗教的な結びつきを最大限に利用してきたの来日であったことから、その実態においてはむしろ「同郷」的な教育環境の中での移動であったとみるべきだろう。

ひるがえって、本書に収録された諸論考をみるに、安易に「越境」なる語に仮託することなく、1930年代という、ある種、はらいのけがたい大きな力人がびとの生き方を硬直化させた時代の特徴とそうした時代を生き抜いた来日留学生の多様な体験を描き出している。

その実例は、アメリカに生まれた日系人とどまることなく、日本の植民地下にあった台湾人・朝鮮人・中国人、さらには日本の勢力圏内に包摂されんとしていたフィリピン人たちに及び、戦争熱に煽られ便乗するようにして来日修学したもの、戦争を嫌悪し日本を離れたもの、はたまた戦争が始まったため日本から出られなくなったものと多様である。

マイグレーション研究会による共同研究の成果、必読の書である。

はじめに (山本剛郎)

第I部 北米・ハワイ編

第1章 望郷のハワイ——二世作家中島直人の文学 (日比嘉高)

第2章 日系二世の日本留学と異文化理解の過程——メアリ・キモト・トミタ『ミエへの手紙』より (水野真理子)

第3章 ハワイの日系音楽界で活躍した婦米二世たち (中原ゆかり)

第4章 ある婦米二世のあゆみ (山本剛郎)

第5章 広島市内における日系二世の分布と就学および一世との関係 (飯田耕二郎)

第6章 日系二世仏教徒が見いだした「仏教」——比較思想史の視点から (守屋友江)

第II部 アジア編

第7章 在日フィリピン人留学生と日本帝国のソフト・パワー政策 (木下 昭)

第8章 ある台湾人女性の日本留学体験——許秋槿のライフヒストリーを中心に (城田千枝子)

第9章 朝鮮人学生の留学と就業——立命館大学の場合 (河原典史)

第10章 大連における日本人学校への「留学」——中国人の日本留学をめぐる多様性 (佐藤 量)

おわりに (飯田耕二郎)

## 本書の 内容

## はじめに

山本剛郎

本書は、「1930年代における来日留学生の体験：北米・ハワイおよびアジア出身留学生の比較から」を共通テーマとする、マイグレーション研究会メンバーの有志による、研究成果をとりまとめたものである。これまで、移民学会でのシンポジウムやマイグレーション研究会での数回にわたる討論など、口頭による報告は、その都度、おこなってきた。また、私版ながら印刷物をも公表してきた。そうしたなかで寄せられた貴重なコメントや示唆等を踏まえて、これまでの検討結果を、ここに、共同研究の総決算とでもいうべく一書にまとめる運びとなった次第である。なお、マイグレーション研究会とは、歴史学・地理学・経済学・人類学・社会学・宗教学・文学などを専攻する、おもに関西居住の学徒が移民・移住に関わる諸問題を互いに協力しあって調査・研究しようとの目的で、2005年に結成された研究会である。

以下、共通テーマに即して「1930年代と日本」、「アジアの人たち・留学生」、「北米・ハワイからの留学生」の順に論じ、併せて研究の視点・枠組み、本書の構成などにも触れておこう。

### 1) 1930年代と日本

1930年代の状況を理解するために、遠回りのようだが、明治期以降のわが国の動きをスケッチすることから始めよう。明治期以降の歴史の累積の上に1930年代は位置づけられる、と考えるからである。

蝦夷地を北海道と、琉球を沖縄県と、それぞれ改称し、これらの地域の獲得・日本への編入が一段落すると、明治政府は、やがて、周辺地域へ目を向け始める。日本帝国建設に向けての活動開始である。それらが、日清戦争・